

私の履歴書

前橋 汀子

②

の具合が良くないから、冬は暖かい島ですごすことにしているんだ。君がマジョルカまで来てくれれば、ゆっくりとレッスンできるよ」

68年1月、私は地中海に浮かぶスペインのマジョルカ島に飛んだ。レモンやミモザの花が咲き乱れる中で3週間にわたってシゲティ先生の最初のレッスンを受け、一緒に食

の具合いが良くないから、冬は暖かい島ですごすことにしているんだ。君がマジョルカまで来てくれれば、ゆっくりとレッスンできるよ」

埋め尽くされていた。7時を回ってもレッスンは終わらないとカツンカツンと床が鳴った。階下の奥様が杖で天井を突き、時間ですよと合図を送っていたのだ。

レッスンは独特だった。ベートーベンのコンチェルトを

みふけたこともある。

先生は欧州の知識人の一つの典型といえる方だった。常にネクタイを締め、食事には必ず白いナプキンと銀食器を使う。朝のうちに世界中から届く手紙に目を通し、送り主の言語で返事を書くのだ。

私の旅先に届いた手紙には「昨夜、寝ながら考えたのだが、バッハのフーガのあの部分はこんな指づかいがいいと思う。試してみるといい」とあり、手書きの楽譜も添えられていた。「アイコ、僕の手紙は捨てない方がいい。後で高く売れるからね」とユーモアも忘れない人だった。（バイオリニスト）

シゲティ先生

少し時代を前に戻そう。私は1967年晩秋、スイスのモントルーに向かった。引退したヨーゼフ・シゲティがそこでバイオリンの個人レッスンをしているのを聞いたからだ。

深い教養 あふれる説得力

美術や文学 レッスンも独特

ニューヨークに住んで1年余り。私はあのめまぐるしい街に少々疲れを感じていた。一方でクラシック音楽の本場ヨーロッパへの憧れは日に日に増している。そんな中で欧州の真ん中に住むハンガリー出身の巨匠に心が動いたのだ。モントルーはニューヨークとは対照的な湖畔の田舎町だ。

1楽章を弾き終えると巨匠が言った。「ここにはいつまでいる？」。今回はレッスンをお願いにきただけのつもりだった。「日本で音楽会があります。急いで帰らなければ」。巨匠は黙ってしまった。すぐにでも弟子入りするものと思われていたようだ。

「すぐに戻ってきます。レッスンをお願いします」と私は妻は言った。「そうか。実は妻



愛犬フーガを抱く
シゲティ先生と

私の旅先に届いた手紙には「昨夜、寝ながら考えたのだが、バッハのフーガのあの部分はこんな指づかいがいいと思う。試してみるといい」とあり、手書きの楽譜も添えられていた。「アイコ、僕の手紙は捨てない方がいい。後で高く売れるからね」とユーモアも忘れない人だった。（バイオリニスト）

シゲティ先生はレマン湖を一望できる高台にあった。「君は何を弾くのかな」。快く出

「すぐに戻ってきます。レッスンをお願いします」と私は妻は言った。「そうか。実は妻

の具合いが良くないから、冬は暖かい島ですごすことにしているんだ。君がマジョルカまで来てくれれば、ゆっくりとレッスンできるよ」

シゲティ先生はレマン湖を一望できる高台にあった。「君は何を弾くのかな」。快く出

「すぐに戻ってきます。レッスンをお願いします」と私は妻は言った。「そうか。実は妻

の具合いが良くないから、冬は暖かい島ですごすことにしているんだ。君がマジョルカまで来てくれれば、ゆっくりとレッスンできるよ」

の具合いが良くないから、冬は暖かい島ですごすことにしているんだ。君がマジョルカまで来てくれれば、ゆっくりとレッスンできるよ」

の具合いが良くないから、冬は暖かい島ですごすことにしているんだ。君がマジョルカまで来てくれれば、ゆっくりとレッスンできるよ」